

## 日高実業協会 ―明治三十六年八月の日高博

大自然の懷に抱かれ青草を食む馬、日高沖合に遊泳する魚群、豊かな自然に恵まれたこの浦河の産業は、明治三十五年当時は資金の乏しい零細企業が多く、まだ経営基盤も弱かった。町の発展をうながす産業の振興は、各産業の経営改善だけでは十分とはいえず、行政と各産業同士間とで手を結び、官民一体となって互いに研鑽しあわねばならない。そう痛感されていた、ときの浦河(日高)支庁長西 忠義は、自ら日高管内各地域の住民代表と会い、協議を進めた結果設立したのが「日高実業協会」である。目的は産業方針を明確にして、改良と発達を図ること。目的達成のため、五つの実業計画が練られた。

- 一、商工業、水産、農業、畜産に関する実業教育の普及を行う
- 二、実業に関するさまざまな組合やサークルと相互交流を深め、事業の援助を行う
- 三、官庁の諮問に応じ意見を述べる
- 四、各種の共進会や品評会を開催する
- 五、実業界で功績のあった者を表彰する

以上の事業である。

いま手元に「第二回日高実業協会報告」という冊子がある。日高実業協会が、その発足二年目に開催した第二回日高産馬共進会と、第一回日高水産工業品評会の報告書である。明治三十七年の発行であるが、共進会、品評会は前年の八月二十五日から三日間行われ、浦河、三石、静内、新冠、沙流、様似、幌泉など七郡から出品を募り、産馬を始めとして日高の全生産物を網羅(もうら)した、当時としては画期的な“日高大博覧会”であった。ちなみに第一回の日高産馬共進会は前年の三十五年、静内で行われている。

会場はすでに現在地にあった浦河尋常高等小学校。正門には松の枝でふいた緑のアーチ門がしつらえられ、日章旗・日高国旗を飾り、雑穀で日高実業協会の六文字を掲げ、庭の前の中央には万国旗をひるがえさせるといった華々しい会場設営であった。

右側に十三室一棟の廐(うまや)、左側には馬匹の審査所、玄関の右側二教室のところには水産部。左側二教室には工業部、第一教室は参考陳列室、第二教室は来賓の休憩室、第三教室は事務所として振り分けられた。出品されたものは馬匹九頭、水産食料一四九点、油類三六点、海藻類二三四点、肥料五六点、生糸四〇点、真綿二三点、縫物七六点、木工品一八〇点、鉄工品四一点、皮革製品や機械類二五五点。しかし審査の結果は、いずれもあまり芳しい評価は得られなかった。

馬匹は出品頭数四九頭のうち三八頭に疾患がみられ、上軀は改良されているものの、前回より全体的に優れているとはいえず、蹄の管理にもっと注意するようにとの厳しい評を受けた。煮干類や生糸、真綿についても評はふるわず、粗悪で光沢が十分ではないとの指摘だった。

産馬、物産の品評会が行われるのに併行して、農商務省や道庁の専門技師たち八名が招かれ、各自の専門分野の立場から、北海道における農業と牧畜業の将来性について、熱を帯びた提言がされた。“馬産は国家的事業なり”と題し、農商務省農政局技師兼陸軍獣医学士の岸本雄二は、当時の軍国主義的体制下における軍備増強の要請から、競走馬としてよりも、武器弾薬、人員を輸送運搬する手段とし

ての馬産の有用性を説いた。

一方、道庁の技手農学士佐藤六郎は岸本の立場とは相い容れず、実用的な立場からその意見を述べた。牧畜の経営をいかに行うか、耕作の労働力としての馬の品種改良、牧畜の発達をうながすための産馬組合の必要性など。また、肥沃な土地柄を生かして牧草を栽培し、輪環法による放牧、駿馬育成のための競馬の奨励を提言している。

水産業の振興については、道庁の水産巡回教師森 房次郎が述べている。彼は日高の水産業の将来を展望して、暖流と寒流の合する日高沿岸は、地理的条件に恵まれているにもかかわらずその利点を生かしていない、と断ずる。漁家戸数一、五六一戸、一戸当りの月収七円という貧しい経済状態を打開するために、漁船を大型化して共同所有し、浅海から沖合へ、沖合から遠洋へと事業を拡大できるように努力し、これに道も補助をしてゆく方策をとるべきだと提起する。

これを受けて、日高実業協会総会では日高種馬牧場の設置(三十五年度)、水産後継技術者の養成、漁港築設、郡農会(農協の前身)の経費免除などを建議し、請願を進めてゆくことを確認している。また各業界の組織化が決議され、農会のほかに産牛馬組合、水産組合、森林組合、商業組合など各産業の総合会設立運動が進められることになる。

またこの博覧会では、余興の部として、花火大会、幻燈会、競馬が催された。数十本の花火が打ち上げられ、夜空にきらめく閃光が美しい色彩の花を描く。幻燈会では遠洋漁業に関するフィルムが上映され、向別(現堺町)で行われた競馬では、騎手の妙技、駿馬の疾走する姿に拍手喝采の渦が巻き起こった。

西 忠義が初代会長を退いた後は、歴代の日高支庁長がその志を継いで、赴任と同時に会長の任にあたるのだが、終戦とともに日高の開発は新たな転機を迎えた。北海道全体を視野に収めた総合開発計画の必要性から、協会は発展的解散となり、約五十年にわたって日高の産業の基礎を準備した巨大な活動の幕はこうして閉じられた。

[文責 高田]

#### 【参考】

第二回日高実業協会報告 明治三十七年 日高実業協会